私の幼児教育研究の宿題 (1)

三木安正

まえがき

私の幼児教育研究は、みんな尻切れトンボになつているので、幼児教育の研究に関して記せといわれると、私のかゝえている宿題の虫ぼしをするような恰好にならざるを得ない。

倉橋先生は、それでもよいといわれるので、久しぶりで虫ぼしをさせてもらうことにした。

私が実際に手がけてみたものは、(1)、精神薄弱児の幼稚園、(2)、農村の保育所、(3)、都会の幼稚園という順であるが、その手がけ方は、(1)、(2)、(3)の順に手うすになつている。どれが一番魅力が大きいかといえば、やつぱり、(1)が引力が強いようであるがいづれも捨てがたいものがある。

次に、順を追うて、私の宿題をならべてみよう。

(1)、精神薄弱児の幼稚園

昭和十三年の十月に愛育研究所が設立され、私もその一員に加えていただいたが、私に与えられた研究室は第二研究室すなわち異常児研究室であつた。

研究をするためには、その対象がなければならない、しかも愛育研究所の研究対象は一応、年令的に就学前の子供ということになつているので、就学前の異常児のうち、精神薄弱児を対象とした幼稚園のようなものをやつてみることにした。はじめは一週間に二回、後に一週三回とし、はじめは私と伊藤良子女史(記録担当)、後に保育担当として小溝キツ氏が加わつた。園児は同研究所の教養相談室に相談にきたもののうちの該当者、ついで、地元の区役所で就学猶予、免除者をしらべてきて、かん誘をした。園児数は五名乃至八名といつたところであつた。この幼稚園が尻切れトンボになつたのは、戦争が激化して、子供をつれての東京の生活に危険を感ずるようになつてきた(昭和十九年はじめ)からで、私も別の理由で愛育研究所を去つたのであるが、終戦後、昭和二十四年に、今アメリカに留学している津守真君、牛島

義友教養部長、斎藤文雄所長らの御尽力によつて復活し、一昨年には小さいながらも独立園舎が出来、小溝氏も再びもどつてきて、次第に盛んになりつゝあるのは、まことに有難いことである。

この種の幼稚園には、ナチス時代のドイツに、シュールキンダーガルテン（学校幼稚園）と称して、就学の時期には達したが、学校教育をうけるためには、まだ能力が不足しているという子供を一年乃至二年入園させるものがあるということを、後に文献によつて知つたが、先般アメリカから帰つた人の話によると、イリノイ大学のカーク博士が現在、実験的にこの試みをやつており、すでにある種の効果は見られているが、その結論は数年後に発表するといつておられた由で、これは相当立派にしつらえられた教育実験であるらしいので、その結果が待たれるのである。

さて、私どもは、幼稚園で十分に手をつくした精神薄弱児群と、ただ家庭におかれている精神薄弱児とを比較対照しながら研究するというような大がかりなことは出来なかつたので、専ら数名の精神薄弱幼児を保育しながら、その心理（特に言語と行動）をケース・スタディーといつた形で研究したのであつたが、（愛育研究所紀要第三輯「異常児保育の研究」昭和十八年）保育の問題としては、寸時もジッとしていない子供、筋のとおつたことの出来ない子供、頭の仂きが浅くてバラバラの子供に少しでも意味のある仕事、まとまりのある仕事をさせ、落着きを与え、経験の整理をするといつたことを目標とした試みを行つてみた。

普通の子供を扱つていると、きわめて何でもなく過ぎてしまうようなことがらが、精神薄弱児では一々障碍にぶつかつてストップを喰うわけで、ここに彼等の指導のむずかしさと面白さがある。

たとえば、木製の玉をころがして同じ木製のビンの形をしたものを倒す玩具をつかつて、子供たちの理解のひろさや興味をしらべてみた。はじめは、ただ、そのまゝビンを床上にならべて一メートルぐらいの距離から玉をころがさしてみると、玉がビンに当つてそれを倒せばすべての子が、よろこぶ。しかし、あらかじめどのビン（ビンにはそれぞれちがう色がぬつてある）を倒してやろうというようなねらいをつけている子となると一人、二人にすぎない。

次に、屋内用のスベリ台の上から玉をころがし、ころがつていつた玉が床上にならべてあるビンを倒すというしかけにしてみると、もう大部分の子が、玉がスベリ台をころげおちて行くことだけに気をとられ、ころがつて行つた玉がビンを倒すかどうかということは、もうどうでもよくなつているかに見られる。

それから、スベリ台をころがりおりた玉の進んで行く道に積木でトンネル

を作るとか、さらにその道を積木で二またに分けるとか、いろ〳〵途中を複雑にして行くと、ますます玉をころがすということとビンを倒すということとの間の関係が薄くなつて行く。

このくらいの複雑化なら、普通児の場合ではおそらく一層興味が増すはずであるが薄弱児では興味の中心が失われてしまうのである。つまり、一つずつの簡単な事柄の理解は出来ても、それらをつなぎ合せた場合には、必ずしもその全体の理解はできないこと、あるいは、精神薄弱児では、そうした場合には、すでに理解されている簡単なことがらさえ、理解できない状況に逆行もすのではないか。むずかしくいえば、ことがらの体制化とその再編成といつたことに普通児と大きな隔りが出来てくるのではないか、といつたことが問題としてとりあげられよう。

そのようなことを結論するには、無論実験的研究の結果にまたなければならないが、教育的には、そうした個々バラバラの狭小な理解、把握を出来る丈広くものにするために、うまくつなぎ合せることの工夫をする必要が考えられる。

一般に学習指導をして行くためのカリキュラムというものは、いろ〳〵なこまかい経験をつなぎ合せて広い理解に達せさせるための計画表であるわけであるが、普通児なら、さつさと子供の方で、そのつなぎ合せをやつてくれるのに、精神薄弱児ではまことにそのつなぎ合せがむずかしいのである。

彼等に粘土を与えておだんごをつくらせる。非常に程度の低い子供は、てのひらを、一定間隔で相互に平行的に廻して、粘土の球を作ること自体も容易ではないが、それはまあ仕上げられたとする。ところで、おだんごが出来れば、普通児では、それで何かして遊ぶであろうが、精神薄弱児では出来上れば、それつきりでおしまいになつてしまう。そこでこちらで、おだんごを二つ重ねて、雪だるまのようにして、「さあ、これはお人形さんだよ」といつても、上下に重ねられた大小の球はお人形さんにはならないらしい。そこで、もう少しサゼツションを与えたらと思つて、ボール紙細工で帽子を作つてやつて、頭にのせたら、ようやく、それがお人形さんとしての意味をもつようになり、遊びに使えるようになつた。

またある時は、そのおだんごに曲げたはりがねをさし込んでおいてかわかし、それを糸でつないでブドウの房のようにして、子供に着色させた。それは本物のブドウとつながりが出来たようである。それから、ブドウの葉の形に下絵をかいたヌリエをやらせて鋏できりぬかせ、先生達が作つた竹のブドウ棚に段々とつけていつた。

子供たちはくるたびに一房のブドウをつくり、数枚の葉つぱを作りして、そうしたいくつかの仕事を合成して、ブドウ棚が次第ににぎやかになつて行つたが、そのあと、これをどう活用す

るかには仲々いい知慧が出ない。

ブドウ棚の下でお八つをたべてみてもたいして面白くない。このブドウ棚が子供の活動場面を規定する舞台のようになればと考えて、指人形で蜂や狼などを作つてもらい、それらがブドウをさしたり、ブドウにとびついたりというように遊ばせてみたが、結局のところは、大人の夢想した子供の世界に終つた観がある。しかしながらブドウ棚作りの仕事は、かれこれ二ヵ月以上は続いたのではなかつたかと思う。子供が幼稚園に来て、それをするのが一つのお仕事だというようになることは、よいことだと思つている。

精神薄弱児の場合、普通人の住んでいる世の中では、どうしても彼等の要求はうけ入れられない。要求のずれがある。従つて、どういう仕事もぴつたりこないので、落着はなくなり、破壊工作が多くなる。

われわれは、日常おつとめに出ることが楽しいのは、つとめ先きで仕事を待つていてくれているからである。いやなことがまつているときには家を出たくない。わけのわからないものが待つている（これは待つているとはいえないが）ところへはいつてもいかなくてもいいということになる。

普通児なら、ともかくお友達が待つているということが何よりもうれしいのだが、精神薄弱児はいわゆる社会性が発達していないといわれるように、お友達あそびがうまく出来ないから、その興味はずつとすくないだろう。むろん、仲間と顔を合せることには何となく期待をもつてやつてくる。だれかが休んでいると、○○ちゃんどうしたんだろうという。しかし、顔を合せればそれでおしまいで、お互に遊ぶことが出来ない。先生がうまく遊びの中にひきいれてやることが出来れば大成功であるが、その遊びはきわめて浅いものにとどまるであろう。しかし、その指導に力をつくさなければ、言葉や数の観念も発達しない。言葉はむろんのこと、数の観念の如きも、その基底には人と人との交渉（例えば交換とか順番とか）があつてはじめて出てくるのである。

以上のような事実をつきつめて行くと、精神薄弱児の場合だけにかぎらず、普通児の場合でも、どんな社会が彼等を立派にはぐんで行く社会であるか。またどんな経験がどんな工合にむすびつき合つて、精神的な力が育てられて行くかといういろいろな思いが、洋々とした大海原の前に立つたように、わきおこつてくる。これはまことに大きい宿題である。

しかし、そうした人類の宿題とでもいうべきものをすゝめて行くために、わたくしどもは、実にこまかいと思われるような仕事をしてデーターを蓄積して行かねばならないのである。